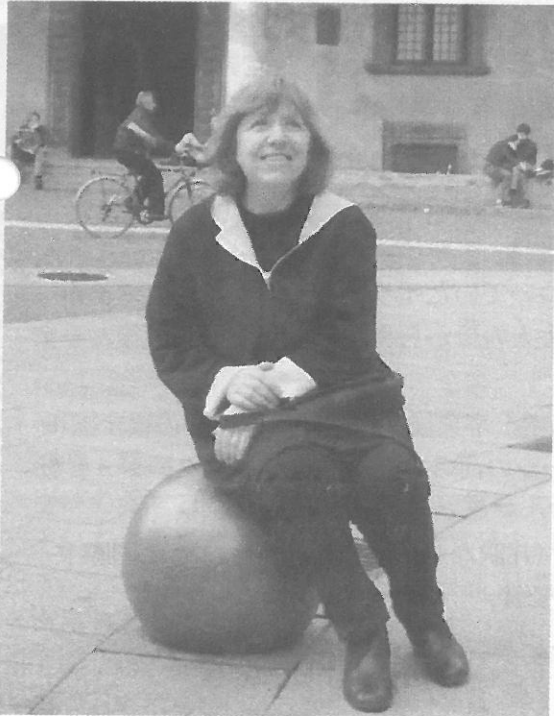


—— チェルノブイリに思いをよせて ——

ポレーシエ



アレクシエーヴィチさん招聘事業

いよいよ本格始動！！

拝啓 スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ様

初めまして。私たち「チェルノブイリ救援・中部」は、1990年の創設以来、ウクライナのパートナー「移住基金（人質基金）」を通じて、チェルノブイリ原発事故の被災者への支援活動を続けています。

あなたの作品「チェルノブイリの祈り」を日本語に翻訳してくださった中川妙子さんも、私たちと一緒に活動してきました。12年にわたる私たちの活動は、ウクライナとの関係をより濃くしました。その一方で、チェルノブイリ原発事故に対する、日本での関心が薄らいでいくことにジレンマを感じずにはられません。

あなたの作品の中に存在するさまざまな“声”は、私たちと同じだけの痛みを与えます。痛みを共有す

れば、おもいやりの心を生まずにはられません。現に、私は「チェルノブイリの祈り」を読んで、あの事故を背負っている人々の苦しみを初めて知ったような気がします。

1999年、茨城県東海村で起きた原子力発電所の臨界事故で、二人の方が亡くなり、600人あまりの方が被曝しました。それは、「チェルノブイリの祈り」そのもので、いとも簡単に個人がひねりつぶされてしまうことを目の当たりにしました。

(次ページへ続く)

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：大谷早苗

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10:00~17:00）

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org（アドレスが変わりました）

しかし、2000年にNHKで放送された「ロシア 小さき人々の記録」の中であなたは、歴史を背負いながらも生きる力を失ってはいない若者を取り上げておられました。

恋人の脱走を手伝ったリンマ・シフツォーフ。チェルノブイリを背負ったトーリャ・イグナチェンコ。彼らの存在は、私たちにとっても“未来”だと感じています。

米同時多発テロ事件とそれに続くアフガン空爆があり、その後もパレスチナ、イスラエル、イラクなど、悲惨な死が、悲しみが、憎しみが、増えすぎて私たちは思わず目をそらしてしまいます。しかし、あなたは向き合おうとする。その姿勢に私たちはひどく感銘を受け、生きる方法を探し始めます。

是非あなたに日本に来て頂いて、あなたの肉声で、あなたが見聞きしたさまざまな“声”と“痛み”を、少しでも多くの方に伝えて欲しいというのが私たちの願いです。

あなたに会える日を心待ちにしています。

2002年11月25日

敬意を込めて

チェルノブイリ救援・中部代表 大谷早苗

《スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ氏 略歴》

- ・1948年 5月31日 村の教師だった父が兵役についていたイヴァノ・フランコフスク市（ウクライナ西部の州都）で、ウクライナ人の母から生まれた。父の退役後、一家は父の母国ベラルーシに戻った。
- ・1967年 国立ミンスク大学ジャーナリズム学部入学。卒業後には地区新聞、その後全国紙の記者として活動。「ネマン（ベラルーシの河の名）誌」のルポルタージュ、社会評論部部長を務めた。
- ・1983年 最初の本「戦争は女の顔をしていない」（邦訳なし）により、ライプチヒ国際ドキュメンタリー映画祭で「銀の鳩賞」受賞。
- ・1996年 文学における勇氣と威厳をたたえる「スウェーデン・ペンクラブ賞」受賞。
- ・2000年 「20世紀の証言者賞」受賞。
NHKドキュメンタリー番組「破滅の20世紀」「ロシア 小さき人々の記録」の制作のため来日。
- ・2001年 滞在中のイタリアでアッシジ平和行進に参加。

《主な著書》

- ・「ボタン穴から見た戦争」
(原著1985年 邦訳2000年 三浦みどり 群像社刊)
- ・「アフガン帰還兵の証言」
(原著1981年 邦訳1995年 三浦みどり
日本経済新聞社刊)
- ・「チェルノブイリの祈り」
(原著1997年 邦訳1998年 松本妙子 岩波書店刊)



※ NHK「ロシア 小さき人々の記録」（ビデオ）や、邦訳された3冊の著書をごらんになりたい方は、事務局までお問い合わせください。

※ 6～7ページに、アレクシエーヴィチさんのインタビュー記事の特集しました。

新生児集中治療室 (NICU) からの報告

神野美知江 (看護師)

10月のウクライナ講座でも、「ジトーミル州の『先天性発育障害 (胎児異常) 児』の数値が地区ごとに増加している」と報告しました。その後、州立小児病院の新生児集中治療室 (NICU) で治療を受けた患児数の推移について、グサク副院長から追加報告がありました。直近4年間の数値をグラフにしたところ、ジトーミル州の胎児異常児の出生数増加にともない、NICUに収容された胎児異常児の数も増加しているということが分かりました。

(下図 参照)

ここで胎児異常について簡単に説明します。その異常は、原因により「大きさ」「形態」「機能」と3つに分けられます。

- *大きさの異常：妊婦の耐糖能異常・遺伝的な体格・胎児栄養障害・胎児発育不全等による。
- *形態の異常：遺伝子病・染色体異常・放射線被曝・薬物・子宮内感染などによる。
- *機能の異常：形態の異常・代謝の異常による。

そして、それぞれが独立して出現するとは限らず、2つあるいは3つの異常が同時に出現する場合もあります。NICUにはそれらの胎児異常児のうち、治療可能な患児が収容され、治療を行っています。

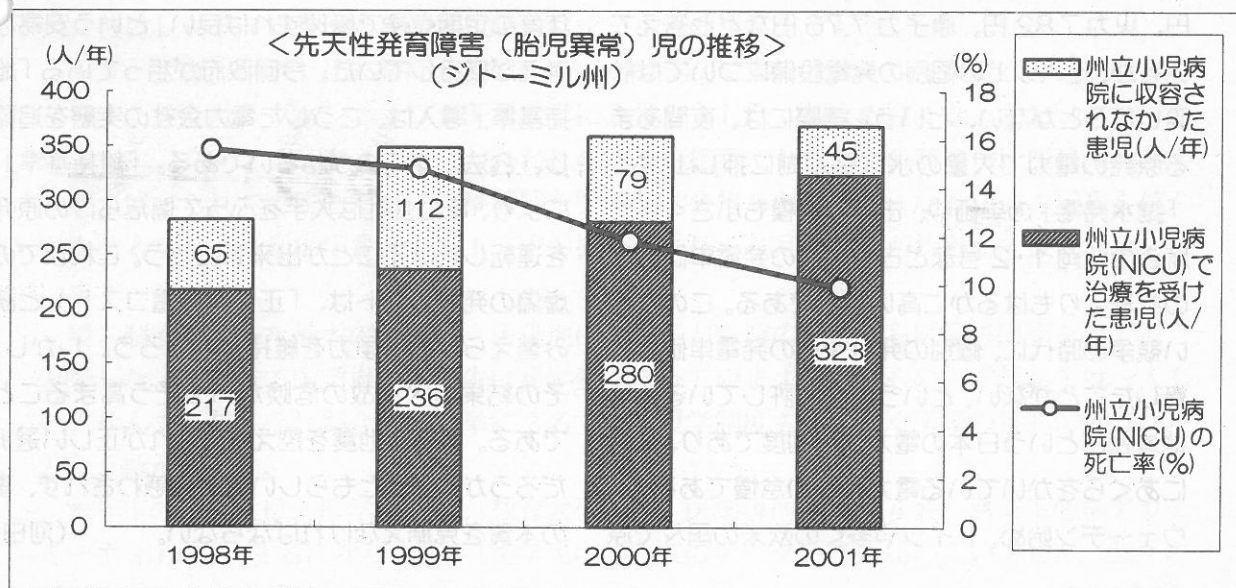
グラフを見ると、1998年の胎児異常の出生

総数は282名。そのうち217名 (77%) が州立小児病院へ収容されました。2001年になると、胎児異常総数368名のうち、NICUに収容されたのは323名 (88%) です。収容されなかったのは、治療不可能な胎児異常児であったかもしれません。

胎児異常児のうち、胎児の栄養障害は母体の合併疾患によることが多いのですが、胎児の発育不全は、染色体異常・感染・中毒のほか放射線被曝・遺伝的な素質などが考えられます。つまりチェルノブイリ原発事故当時に被曝した子ども達が、親になっていることも一因ではないかと推測されます。

また、NICUの受療者数が増加しているのに、死亡率が下がっていることが分かりますが、『「救援・中部」が医療支援の一環として、NICUに贈った医療機器により、命が救われる子どもが増えました。』とグサク副院長は訪問時に語っていました。NICUには、保育器や呼吸器などに貼られた「とどけ鳥のステッカー」が溢れています。「それらの機器が、確かに救急医療の現場で活躍している」という事を証明していると思います。グサク副院長は、次年度は増床を行うと語っていました。つまり、死亡率が下がっているという事実があれば、誰もがこのNICUで治療を行って新しい命を救いたいと思うでしょう。

私たちの活動の成果が、データとして報告できる事は、私にとっても嬉しいことです。



原発の維持基準は危険 ——電力会社の事故隠しと政府の追認——

次々と発覚する電力会社の事故隠し。これまで 32 年間、絶対安全を主張してきた日本の原発の安全理念が今、根幹から変えられようとしている。一言で言えば、「事故を未然に防ぐための徹底的な検査と修理」というこれまでの考え方から、「傷を未修理のままの運転を認める」という『維持基準』の導入である。「これが現実に即したやり方だ」と、政府の原子力安全保安院や原子力の専門家は主張する。一連の事故隠し事件で明らかになったのは、これまでも実際は傷だらけの原発を運転してきたのであり、「絶対安全を保っている」という電力会社や政府の主張自体が虚偽であった、という事実である。電力自由化の厳しい競争に直面し、「絶対安全」の建前さえも維持できなくなり、改めて「傷だらけの原発の運転を認めざるを得なくなった」というのがこの本質である。

経済性で劣る原発

読者は、「電力会社がこれまでコスト計算をきちんとやったことがない」と聞いて驚くだろうか。電力の単価は、 $Kw \cdot 時$ の電力を何円で発電できるかで表す。公式には資源エネルギー庁のモデル計算がある。それによれば原子力 5.9 円、水力 13.6 円、石油火力 10.2 円、天然ガス火力 6.4 円、石炭火力 6.5 円である。しかし、これは各発電設備が 4 基、60 万 Kw 、耐用年数も 40 年など現実とはかけ離れた架空の計算である。各電力会社は、種類も規模も基数も違う発電設備をもち、それぞれ固有の発電単価があるはずである。例えば中部電力は今年 6 月の株主総会で、水力 7.67 円、火力 7.82 円、原子力 7.76 円などと答えているが、それ以上の個別の発電設備については計算したことがない、という。実際には、夜間あまる原発の電力で大量の水をダム湖に押し上げる「揚水発電」の単価や、古くて規模も小さく事故続きの浜岡 1・2 号など古い原発の発電単価はこの発表よりもはるかに高いはずである。この激しい競争の時代に、個別の発電設備の発電単価も計算したことがない、という態度を許しているのは、地域独占という日本の電力供給制度であり、それにあぐらをかいている電力会社の怠慢である。スウェーデン始め、ドイツや多くの欧米の国々で原

発廃止を決めた背景は、もちろんチェルノブイリ事故だが、事故を起こさないための原発のコスト増大により、火力・水力などとの競争に耐え切れなくなったからである。イギリスは、電力民営化に当たり、コストの高い原発だけを国有化した。日本はこれまで、事故だけでなく原発の本当のコストを隠し、虚偽のコストを守ってきたに過ぎない。

虚偽のコストを守るための「維持基準」

事故隠しのほとんどは、傷の修理による点検期間長期化による稼働率低下を避けるのが目的であった。傷が見つかって「兆候」とごまかし、「次年度の定期点検で修理すれば良い」という安易な考えが横行していた。今回政府が狙っている「維持基準」導入は、こうした電力会社の実態を追認し、合法化するのがねらいである。「維持基準」により、電力会社は大手をふって傷だらけの原発を運転し続けることが出来るだろう。これまでの虚偽の発電コストは、「正しい発電コスト」と読み替えられて競争力を維持するだろう。しかし、その結果は大事故の危険がいつそう高まることである。東海大地震を控えて、これが正しい選択だろうか。もっともらしい説明に惑わされず、事の本質を見据えなければならない。(河田)

お化粧直して、車椅子は待機中

10月20日(日)午後より、知多市の榎本さん宅で、車椅子の修理作業を行いました。「え、そんなことがあったの？参加しなかったな」という読者の方、ごめんなさい。ポレーシェの読者以外に支援者を広げる目的で、あえてポレーシェではなく、ボランティア情報誌のみにボランティアの募集の呼びかけを載せたのです。しかし、そんなに簡単に人が集まるはずもなく、一般の参加者は0人でした。企画をした私としては、よい勉強になりました。

そもそも今回の作業は、チェル救の中古医療機器提供の呼びかけに、廃棄される運命にあった未使用車椅子の寄付の申し出があったことがきっかけでした。当初、修理検品をしてもらって早々にウクライナへ送るつもりだったのが、みんなで修理をしたら楽しいかなというこで行ったものです。当日は車椅子を提供していただいた三貴工業所様から、3人(北鬼江さん、中村さん、岩井さん)の社員の方がボランティアで手伝いに来てくださり、運営委員も合わせて総勢10人で、わいわいと車輪を取り付けたりチューブを交換したりしました。

梱包前に空気漏れの検査と拭き掃除をして生き返った車椅子に、物好きな2名が試乗体験。初めての車椅子操作に右往左往してました。

最終的に梱包したのは、三貴工業所様からの車椅子14台と、個別にいただいた車椅子2台、バギー1台で、計16台が輸送を待つことになりました。

作業にあたられた皆様、お疲れ様でした。(佐保)



待望の医学生2名を採用…2002年度新規奨学生

今年度の新規採用奨学生に2名の医学生が含まれます。

一人は、オフレスク出身のフェリックス・クリヌイチコさんです。彼は、今春ジトームル医学専門学校の準医師コースを卒業し、ポルタヴァ医学アカデミーの歯学部に入りました。彼は、ジトームル医学専門学校時代にチェル救の奨学生でした。

もう一人は、今年1月末発行の『ポレーシェ67号』に載ったネーリヤ・アタマンチュクさんです。彼女は、ヴィンニツァ医科大学に入りました。彼女の亡くなったお父さんパーヴェル・アタマンチュクさんは、われわれの文通の相手でした。この時には、医科大進学希望が述べられていましたが、見事難関を突破して合格したのです。なお、この記事を読んだ支援者から、3月に学費として1万円が振り込まれ、9月訪問団が持参して彼女に渡しています。

奨学制度を作った最大の目的は、汚染地に住む子ども達のなかから医療専門家を育てることでした。これまで医学専門学校生は奨学生になっていますが、肝心の医学部学生は一人もいませんでした。それが今年は一挙に2名です。奨学制度もようやく所期の目的に近づいたという感じがします。

本年度の奨学生は、医学生2名、教育大生5名、医学専門学校生4名、農業生態学アカデミー生2名の計13名になります。(奨学生についてのデータがまだ届いていません。個々の奨学生の紹介は次号以降に行います。)

(田中良明)

小さな人々の大きな物語

（「ロシア文化通信群」（群像社）第20号より
転載許可を頂きました。）

★イタリアに住んでもう2年目ですね？

私だけが外国に住んでいるのではありません。何人ものベラルーシの作家たちが、例えば、ワシーリイ・ブイコフのような世界的に有名な作家も含めて、ベラルーシを出国せざるを得なかったんです。わたしはイタリアですが、ドイツにいる人も、フィンランドにいる人もいます。これは今ベラルーシで起きている様々な状況のせいです。ベラルーシではルカシェンコ大統領の強固な絶対制が確立しました。

時間は止まってしまいました。共産主義時代という私達の過去の長期保存が決まったようなものです。今回（2001年9月）の大統領選挙ではルカシェンコが再選されました。国民は脅され、どうしていいかわからないうちに、なされるがままになってしまったからです。知識人は、そうした最近の事態の前に無力でした…。

私の本は世界の数十か国で出版されています。フランス・ドイツ・スウェーデン・イタリアなど。でも、母国のベラルーシでは出ていないのです。ロシア語では出ていますから、ロシアから持ち込まれますが、これが政府に同調しないで、真実を語る勇気を持った人たちに対してベラルーシ政府が取るやりかたなんです。でも、軋轢（アツキ）や内面的な傷はイタリアにいる方がずっと深く感じます。

権力に面と向かって真実を語るより、国民に真実を語るほうがずっと難しく恐ろしいからです。私たちベラルーシ国民は自由を享受する能力がなかったのだ、民主主義を享受す

る能力がなかったのだという真実です。私たちがたちどころに回れ右させるということができちゃったのです…。だから、私たちをこの先待ち受けて居るのは未来ではなく、過去なんです…。ついこの間の、民主主義への期待と引き換えに…。

★イタリアでは何を？

国際的な作家支援組織が、2年間の奨学金を出してくれました。ピサの斜塔のすぐそばの小さな町に住んでいるのですが、こちらに来て私はイタリアが好きになりました。

その驚嘆すべき過去を感じさせる風景・言葉・人々。戻る時には別人になっているでしょう。生きるということそのものをもっと愛するようになって…。私の内面の視線はもっと鋭くなるでしょう。一人一人の火の中に、大きな宇宙を見つけだす喜びを学んだ気がします。もっとも、それはこれまでの本を書くときにいつもやってきたことではありますが…新しい本を書いている今もそれはそうです…。

★今はどんなことに興味をお持ちですか？そもそも、かつてのソヴィエトの作家たちは今何を書いているんですか？

かつてのソヴィエトの作家たちは、今は書くより沈黙し、考え、観察しています。それはそうですよ。この世界はあまりに激しく変わって、その変化は続いているんです。社会主義からどこへ向かっているのか？ 資本主義の方へ？ 独裁へ？ ついこの間までソ連という一つの大きな国であった大釜の中で何が煮えているのか、どういう料理になるのか誰もわからないんです。この新しいプロセス・新しいタイプの人間・新しい思想・新しい心理といったものを、ただちに理解することなど天才でも手に余るでしょう。レフ・トルストイだって『戦争と平和』を書いたのはナポレオン戦争後50年経ってからだったということをお思い起こしてください…。

私たちの場合はペレストロイカから10年しか経っていないんです…。

★新しい本は何についてですか？

愛についてです…。

★これまでの作品が激動の20世紀・戦争・収容所・ユートピア帝国の崩壊についてだったのに、テーマが急に「愛について」になるとは思いませんでしたか。

私が書いているのは、ユートピアに生きた人びとの一つの年代記なんです。それを数十年かけて書きついでいるんです。私の対象は、相変わらずソヴィエト人です。ここ数年で私たちは変わったように見えるかもしれませんが、変わったのは街の姿です。西欧風の店が増え、外国の名前がついたキオスクが増え、新しい外車の種類が増えてきた…。でも…街の姿は人びとより早く変わるものです。私たちの大部分は元のまま、ソヴィエト人です。それを考えているんです。私たちは何者だろうか？ 何が起きているのだろうか？ 偉大なる思想の催眠から覚め、バリケードを捨て、演説の舞台を降りて家庭に帰った私たちは、何を考え、何を夢見ているのか？ どんな理想を抱いているのか？ どんな目標をもち、どんな未来を予想しているのか？ 人が思想から自由になると、人生の中心になるのは何だろうか？ それは愛であり、死なのではないか。そういう視点から私たちを、そして私たちの現実を見直しているんです。

私の本では、男たちや女たちが、その愛を

語っています—戦中の愛、スターリン獄での愛、そして現代の…私たちの物語を…小さ



な、そして大きな物語を。

★昨年9月11日（ニューヨークの爆破事件）以後「世界は変わってしまった」とよく言われます。あれが境だとすると、その境はどのようなものだと思いますか？

今、私たちが生きている世界はどう変わったのでしょうか？

そうですね、もうこれまでのようにはいかないんですね。以前はすばらしい明日が信じられました。チャーホフの登場人物たちのように「今にきっと良くなる」という確信を持つことは、もうできないんです。人類は9月11日を境に前に進むのを止めて後退を始めたという気がしてしかたがありません。銃に手をのばし、憎しみの方向へ、世界の分裂の方向へ。新しい悪に直面して私たちはなすすべを知らないんです。チェルノブイリ・テロリズム・新しい形の戦争。悪はこれまでと違った顔をしています…そして、現代人が希望を託したのは相も変わらず武力であり、自動小銃・爆撃機なんです。新しい悪に対峙するに足る新しい思想を手にしていないんです。唯一私の確信は、人間を殺すことは恐ろしいことだ、ばかげたことだということです。私たちの世界を居心地悪く、希望のないものにするそうした思想は、つぶさなければならぬのです。

最近、私のアフガンの本（邦題『アフガン帰還兵の証言』）が多くの国で再版になり、新たに出版されたりしました。私の本の中身が時代遅れにならず、読まれつづけることは嬉しいのですが、「人間は変わっていないんだ」という苦い挫折感もあります。世界は変わっていない、作家が言葉でできることはほんのわずかなことだ、と。でも本というものがなくなってしまったら、私たちに何が残るでしょう？ 植物のように跡形もなく消えてしまうんじゃないでしょうか？（三浦みどり・訳）

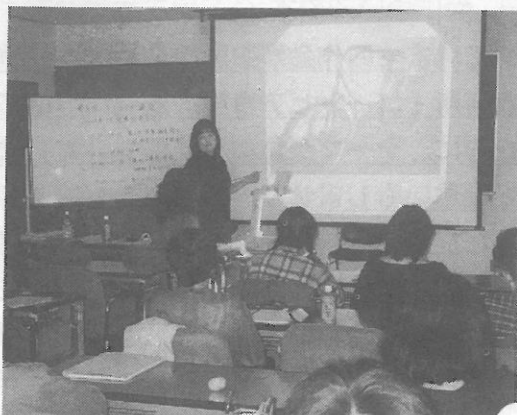
久々の硬派ウクライナ講座でした

去る10月19日(土)、愛知県勤労会館第1講習室において、第5回ウクライナ講座「9月視察団報告会」を開催しました。第二次栄養調査が目的の今回の訪問、専門家として訪問された看護師の林照美さんと神野美知江さんが講師でした。

林さんは初めてのウクライナ行き。「どうして、こんな美しい大地が放射能に汚染されているの!？」と、専門家の立場を越えて、率直な言葉で怒りや悲しみを語ってくれました。汚染された食物が体によくないことが分かっているながら、食べざるを得ない人たちの無念さ。そして、生まれながらにして障害を持つ乳幼児の多さ。それらの事実を私たちに力強く訴えてくれました。

また神野さんからは、州立小児病院で得た医療データを基にした報告や、移住基金のメンバーなどの最新情報が伝えられました。

今後の私達の支援のあり方を探る、貴重な報告会となりました。(市原)



第6回 ウクライナ講座「ウクライナ料理をつくろう」

年末恒例のお楽しみ、ウクライナ料理講座。“ボルシチ”とひとくちに言っても、各家庭の独特の料理方法があり千差万別。さて、今年はどうなボルシチになるのでしょうか。

講師は、8月の講座でおなじみの「シガル・オレーナ」さんと、今年10月に来日した名古屋大学留学生の「ヤロシク・キリル」さんの若きお二人です。

皆さん、お気軽にご参加ください!

◆日 時：12月21日(土) 午後1時～4時

◆場 所：東生涯学習センター料理室(地下鉄「新栄」下車。芸創センター東隣)

TEL 052-932-4881

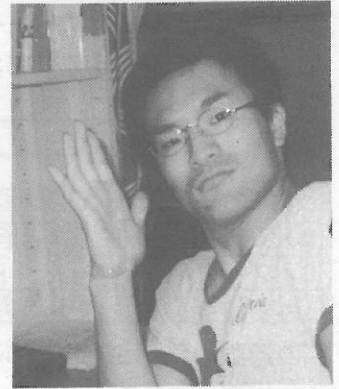
◆参加費：1,000円(材料費を含みます。)

◆定 員：30名・予約制(12月16日までに、事務局にお申し込みください。)

事務局 TEL 052-836-1073

研修！
あっと
言う間の
3カ月

みなさま、お久しぶりです。お元気でしたか？
9月よりこのチェルQにお邪魔させていただいて
おります我々「古江美穂&長町諭」の2名は、早い
ものでもう研修生活3ヶ月目を終えようとしており
ます。これまでにしたことといえば、事務所の資料整理、
「プロジェクトA」立ち上げの補佐（顔合わせで東京にも
行きました！！）、ミルク&カードキャンペーンの呼びかけ、
などです。しかし一番時間を割いたものは、事務局長の河田さん始め、
運営委員のみなさんから「お話を伺う」ということでした。



私たちは「研修生」ですので、勉強させていただく、ということが中心になるのは当然です。
それでも「足手まといになるだけ」は避けたかったので、チェルQの将来にとってプラスになる
ことを、と考え、いろいろアイデアを出してみました。しかし、いまだどれひとつとして成し遂
げたものではありません。それは、発想はできても、それを遂行する能力、経験が私たちには欠け
ている、ということの表れに他なりません。これにより学んだこと、「できることからや
る精神」で、今までの借りを返せたら、と考えている今日この頃です。さりとて、まだまだご迷
惑をおかけすることとは思いますが、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。（長町）

チャリティバザーのお知らせ ～チェルノブイリ救援・中部ミルクキャンペーン～

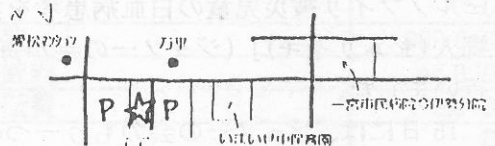
「ハートtoハートキャンペーン」は、1990年にスタートしました。1986年4月26日に起きた、
チェルノブイリ原発事故の被災地「ウクライナ国 ジトーミル州」では、孤児院や小児病院の子
ども達が、今年もクリスマスカードを待っています。会場では、日本の古切手をあしらったカ
ード作りをします。

日時：2002年12月12日（木）10時～18時

会場：「チェルノブイリ救援・一宮 つぼみを守る会」

一宮市今伊勢町宮後西茶原 62-5

TEL.0586-46-0263（中島 方）



ハーブティコーナー (50円)

- カモミール
- セージ
- レモンバービナ
- ローリエ



など

リース (300～1,500円)

- クリスマスリース
- レモングラスの三つ編リース
- ローズマリーリース
- 月桂樹



ハーブの苗 (30円)

- カモミール
- ミント



バターケーキとクッキー

ローズゼラニウム香り…

クリスマスツリー用オーナメント

(イギリス・スイス・イタリア製)

その他

ラヴェンダーのスティック・サシェ・目の枕・リースクラシカルレースを
あしらったティーコゼーや古布のコースターなどの手作り小物



※ バザーで販売する、手作り品などをご協力ください。

竹内さんのウクライナ便り

…「郵政事業庁」支援先現地調査を行う…

キエフ駐在：竹内高明

郵政事業庁国際ボランティア貯金の交付金を用いて、ウクライナでチェルノブイリ被災者に対する支援を行っている3団体(「チェルノブイリ救援・中部」「日本テレコム支援協議会」「ジュノーの会」)の支援先の現地調査が、11月12日から16日まであり、私は全行程の通訳を務めました。

本来は11日から調査が始まるはずだったのですが、10日に降った雪のおかげで、「成田→モスクワ」の飛行機が6時間遅れ、そのため調査員吉開氏(郵政事業庁貯金部管理課)と杵鞭氏(青年海外協力協会事業部国際協力研究課)のキエフ到着が、10日夜から11日夕刻にずれ込んでしまったのです。杵鞭氏はモロッコとジャマイカに長期滞在の経験があるとのことで、10日夜モスクワの空港の待合室でほぼ徹夜状態だっにもかかわらず、キエフの空港からホテルまでの車中で、ずっと私にウクライナの現状についての質問を続けられ、私は感服しましたが、逆にご自分のことはあまり語られない謙虚な方でした。

12日には「救援・中部」の活動に関する監査がジトーミル州で行われ、「チェルノブイリの人質基金」「ゼレムリャ診療所」「州立小児病院集中治療室」の視察がありました。

13日にはBHNテレコム社が、笹川財団から引き継いで(?)試薬等の支援をしている「コーラステン広域診断センター」(「広域」というのは、ジトーミル州北部のいわゆる汚染地区のすべてを管轄しているという意味)訪問、キエフに戻っての「大使館」訪問(私は同席しませんでした)。

14日早朝に吉開さんはウクライナを発たれ、残った杵鞭さんはジュノーの会の支援先である「キエフ市血液センター」「ウクライナ放射線医学センター小児血液病セクション」(いわゆるチェルノブイリ被災児童の白血病患者を治療しているところ)、プリピャチからの疎開者の団体「同郷人(ゼムリャキ)」「ジュノーの会が毎年甲状腺の検診を行い、医薬品を提供している)の調査を行いました。

15日には、ジュノーの会のもう一つの支援先であるチェルニゴフ州(キエフ州の東隣の州)の汚染地域の「地区病院」を日帰りで訪れ、16日にはやはりジュノーの会が医薬品等を提供している「キエフ小児科産婦人科研究所」に行き、そのまま空港に向かうという強行日程でした(杵鞭さんはその後、ベラルーシでも調査をされました)。

杵鞭さんがすでに日本で各団体の事務所を訪れ、好印象を得ていたせいも、各訪問先とも最近の支援物資の存在・資金の流れ等を確認するのが主で、特に厳しい監査はありませんでした。ウクライナ出身の作家ゴーゴリの『検察官』という戯曲を読まれた方もあるかと思いますが、ウクライナでは現在も企業・施設・団体に対する各種の監査がかなり厳しく行われており、その割に大きな摘発を聞かないのは、一方で袖の下等の存在を疑わせます。それに比べれば、今回の監査は(吉開さんも「人質基金」で言われてましたが)支援の結果を確認する、という程度のもの(とっては失礼ですが)でした。

もちろん、「人質基金」をはじめ、ウクライナ側の支援受け入れ各機関が信頼できるものであること、4年前にも同じ監査が滞りなく行われていること(その時は、海外青年協力協会の委託を受けた方がお一人でみえましたが)も大事な要因でしょう。

調査の結果が日本でも何かの形で公表され、ボランティア貯金にお金を預けてくださっている方々の目にも触れることを願いたいと思います。



州立小児病院集中治療室の入口
…「日本からの支援を受けています」と書かれている

NPO法人チェルノブイリ救援・中部の2002年度上半期収支報告書

(2002・4・1～2002・9・30)

収入の部		支出の部	
項目	金額(円)	項目	金額(円)
救援寄付金	3,780,881	事業費	6,977,495
(内訳) 個人(261件)	2,936,425	(内訳) 医療関係支援事業(医療機器提供)	951,080
団体(12件)	844,456	医療関係支援事業(医薬品提供)	2,300,000
運営費関連寄付金	252,000	保健事業費	0
(内訳) 個人(47件)	242,000	被災者団体等支援事業費	456,037
団体(1件)	10,000	特別事業費	0
国際ボランティア貯金交付金	0	奨学金事業費	840,556
外務省ODA補助金	3,420,000	現地派遣事業費	608,442
民間助成金	4,000,000	現地パートナー支援事業費	0
物品売上等	58,300	業務委託費	500,082
預金利子等	547	駐在員費	242,700
立替金未清算差額	1,395	輸送費	444,326
替差益	14	文通・クリスマスカード事業費	0
		国内事業費(機関紙発行)	634,272
		管理費	1,628,785
		(内訳) 役員報酬	330,000
		人件費	384,333
		通信費	216,174
		印刷製本費	50,981
		旅費交通費	201,031
		会議費	14,250
		消耗什器備品費	61,134
		消耗品費	15,904
		機器賃借料	0
		修繕費	0
		事務所費	269,648
		支払手数料	45,820
		広告宣伝費	9,510
		諸謝金	0
		団体会費	30,000
		租税公課	0
		雑費	0
当期収入合計	11,513,137	当期支払い合計	8,606,280
前期繰越	15,450,145	当期収支差額	2,906,857
収入総額	26,963,282	次期繰越収支差額	18,357,002
		支出総額	26,963,282

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

2002年11月9日 監査人 南 和也 (南)

※立替金未清算差額内訳: 現地派遣事業費 海外交通費立替分11,151-円相当(10月19日清算済)

会計: 佐保

事務局だより

本当に早いもので、今年も残すところ1ヶ月。年年歳歳、時の経つが早く感じられるこの頃です。特にインターンの2人が登場してから、事務局の1日はあっというまに過ぎていくような気がします。(もっともそれは、皆でワイワイ言いながらとる昼食に時間をかけ過ぎて、仕事時間が短かくなっているせいかも知れませんが) …さて、その彼らが力を入れて取り組んでいるのが「カードキャンペーン・ミルクキャンペーン」です。こつこつじっくり物事に取り組むタイプの古江さん、バラエティに富んだ思いつきと発想的な発想の長町さん、と個性は全然違いますが、積極的に新しい協力者を見つけ、何処へでも赴き「キャンペーン」を展開しています。どうぞポレーシェ読者の皆様も、是非彼らに声をかけてください。「出張」販売ならぬ、「出張カード作り教室」を行います。また、事務所でも「カード」の発送準備を行います。12月13日(金)と12月16日(月)の午後から。こちらにも是非ご協力ください。話はかわりますが、前号のポレーシェで「FAX電話」のご寄付をお願いしたところ、早速ご提供の申し出がありました。何と、かつて一緒にチェル救で活動したOさん。離れてもずっと折につけご協力して下さる方で、嬉しく、また懐かしかったです。ありがとうございました。また、パソコンのプリンターもOさんからご寄付頂き、やっぱり言うてみるものだなあと事務局員一同 感謝!感謝!です。来年、チェル救は久しぶりに「アレクシエーヴィチ氏講演会」という大きな企画に取り組みます。たくさんの方々に関わって頂きたいと思います。その中から「事務局入り」する若者が現れたらいいな…などと、これは古参事務局員の独り言。今年1年、ご協力ありがとうございました。(山盛)

あなたも「維持会員」になってください!

「チェルノブイリ救援・中部」の活動を運営するためには、直接の救援費以外にも事務所の維持や通信費などの経費が必要です。是非、あなた(もしくはあなたの団体)も維持会員になってください。(その会費は救援費にも維持費にも使われます。)

●維持会員費 1,000円/月(または10,000円/年)

(郵便振替用紙の通信欄【維持会員費の欄】にチェックを入れてください。)

編集後記

- ☆カスピ海ヨーグルトを食べたら胃の調子が良くなり太ってしまった。ついた脂肪を減らすための毎晩の踏み台昇降。階下の人からいつ苦情がくるかと、おびえながら暮らしている。(佳)
- ☆友人を先生にして、趣味を一つ増やした!陽の暮れるのも気づかずに没頭できる贅沢にハミング。(美)
- ☆実家の飼い猫がお泊りに来ました。丸一日かかって、やっと慣れた頃に帰っていきました…お疲れさま。お正月も、また来るんだよ〜。(私はとっても嬉しい。)(古)
- ☆私は今、京都市や守山市でカードキャンペーンをやっています。(於:チェル・救 滋賀出張所・京)
- ☆やらねばならぬことが積算している。いままで逃げ回っていたが、そろそろ向き合わねばならぬ時が来たようだ。すべてを懸けて、俺はこの時を待っていたような気がする……。 (長)
- ☆ '01.09.11以降の事件は「ゲリラ(=戦争)」と呼ばなければならぬ。「テロ(=政治的敵対者を暴力で威嚇する事)」と言い換えた途端、戦争仕掛人「アメリカ」は被害者(善人)になってしまった。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473